

私の「ことばとジェンダー」論 —大学の授業をとおして言語改革を考える—

佐々木 恵理

1. はじめに

佐々木（2001:238-239）は、過去20年の性差別語をめぐる状況をフェミニズム運動と関連づけながら、当時を「個人の『手探りと葛藤の時代』』として「漠然とことばの使用を恐れているこの不安定で危うい感じ」と捉えた。その解決のためには、言語改革への意識を「個人の問題へと引き戻し」、「個人の差別全般への深い気づきが必要」であり、「差別の存在を正面から受け止め、自らの差別意識をえぐり出す」ことであると結んだ。さらに、佐々木（2007:249-250）では、日本語人の言語改革への意識について「ことばの言い換えには強い抵抗を示すものの、ことばが一旦定着してしまえば、新しいことばを何の抵抗もなくすんなりと受け入れ」と分析している。

では、初期の言語形成期を過ぎ、日々新しいことばを習得し続けている大学生は、性差別語やジェンダー表現への気づきを持っているのだろうか。もしそれがないのであれば、その個人の気づきを喚起するための「ことばとジェンダー」教育に効果はあるのであろうか。

私が日本大学文理学部で「ジェンダー論」（前期、後期）を担当して今年（2011年）で7年目になる。受講対象学生は全17学科の1年生から4年生で、毎年の性別比にはほぼ偏りはなく、受講登録数は最小100名程度から最大160名程度である。本論ではこの授業をとおして、学生のことばに対する意識や態度、性差別語やジェンダー表現への気づきを分析し、言語改革への意欲を読みとり、授業の効果と今後の課題を検討したいと思う。

ここで用いるデータは、2011年度前期「ジェンダー論」の授業（登録数155名、うち女子48名、男子107名）のうち、第4回から第7回の4回分のワークシート（作業プリント）の内容に基づいている。なお、文中で用いる「性

差別意識」は「ジェンダー意識」と、「性差別語」は「ジェンダー表現」と同義で使う場合がある。

2. 「ジェンダー論」と「ことばとジェンダー」

「ジェンダー論」や「女性学（男性学）」を冠する研究書などの書籍類はこれまで多く出版されている（佐々木2007:237-249）。教科書として使用できるような入門書であることが多いが、そこには編著者の授業への姿勢が表れている。特に、独自の編集を行っている研究書を3つ挙げてみたい。

日野（1994）は、担当する「日本女性史」の授業を女性学教育として位置づけ、高校の授業で女をめぐるテーマを取り上げることの難しさや、教える立場からの内省的な態度を隠すことなく記述している。沼崎（2006）は性暴力に焦点を当て、自らの授業をエッセイ風に紹介しながら、女子大学生の意識を簡潔に報告している。また、セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク編著（2003）は、長い間、女性学がとりこぼしてきた性的少数者の問題を当事者が分担執筆することにより、「3つの性」（セックス、ジェンダー、セクシュアリティ）を初めて網羅的にまとめている。これらは、従来の定型的な「ジェンダー論」や「女性学」の研究書とは、形式、視点、当事者性などの点で多くの研究書とは性質が大きく異なっている。

そして、言語学で言えば、「ことばとジェンダー」についての論考をまとめたのが中村編（2010）である。論文集のため、系統立てた言語理論や解説はないが、言語とジェンダーを学ぶための入門書として平易で分かりやすい。

「ジェンダー論」の教科書は、その全体を見渡せるような概論的なもののほうがふさわしいが、現在のところ言語学分野は項目として取り上げられていないため、「ことばとジェンダー」の問題は外づけで授業に取り込む必要がある。そして、個人の問題として「差別の存在を正面から受け止め、自らの差別意識をえぐり出す」ためにもっとも重要な点は、学生が意欲的かつ積極的に授業に参加できるような実践的な授業を展開できるかどうかである。それは、学生自身が「ことばとジェンダー」の問題の当事者意識を持てるような授業づくりをする必要があるということだ。

3. 授業の方針と評価

3.1 授業計画と内容

「ジェンダー論」の前期(13週)は、『女性学・男性学 ジェンダー論入門』(伊藤公雄他2002有斐閣)を教科書として授業を進めてきた。初めの数時限(1時限は90分)で、まず「3つの性」を概説し、続く4～5時限でさまざまな資料を用いながら「ことばとジェンダー」を取り上げている。2011年度の各授業のおおまかな内容と資料は次のとおりである。

1. 辞書の定義の中に固定的な「女らしさ／男らしさ」の記述、非対称のことば、「性的な女」として表現される語彙を見る。

資料：ことばと女を考える会(1985)『国語辞典にみる女性差別』三一新書

2. マスメディアである新聞を取り上げ、「女」をめぐる偏った用語使用を見る。また用語の言い換えを試みる。

資料：上野千鶴子+メディアの中の性差別を考える会編(1995)『きつと変えられる性差別語』三省堂

3. 英語の教科書から学んでしまうエイゴ(カタカナ英語)の性差別語が日本語に与える影響とその使用法を見る。またエイゴの言い換えを試みる。

資料：佐々木恵理(1996)「英語の性差別語と日本語人への影響—英語教科書の調査と共に—」『ことば』17号 pp.13-30 現代日本語研究会

4. 「ていねいさ」の視点から、つくられた「女ことば」を見る。また発話の文末表現から「らしさ」を考察する。自称詞の使われ方。

資料：宇佐美まゆみ(2010)「ポライトネスとジェンダー—隠されたヘゲモニー」中村桃子編『ジェンダーで学ぶ言語学』pp.160-175 世界思想社

5. 変化を続けることば。言語改革を考える。

資料：佐々木恵理(2001)「非性差別語への言語改革に今必要なこと」遠藤織枝編『女とことば—女は変わったか 日本語は変わったか』pp.228-240 明石書店

3.2 授業概要とワークシート

授業の初めに、上記テーマにそったワークシートを学生に配る（次ページの資料を参照）。ワークシートはテストではないので、基本的に、設問に対する正解はない。また単純なアンケートとも異なり、回答を選んだ理由を書かせることも多い。学生には、「ワークシートにはどのように回答してもよいし、自由に活用してよい。頭で思ったことを自分のことばで書くこと」と指示する。

ワークシートの記入は授業の核をなすものである。日ごろ学生が考えたことがないような問いかけがあったり、あまりに「普通」であるために改めてその理由を書くのが難しかったりと、多くの学生は混乱する。特に学期が始まって間もないころは書く手が止まってしまう学生もいる。さらに、設問によっては、主張に一貫性がなくなってしまう、学生は依拠する自分自身への信頼そのものが崩れてしまうという経験もする。

こうしたワークシートでの作業は、実のところ、回答することそのものが目的ではない。自分がそうした答えを導き出し、自分自身で書き、自分の考えを明確にすることが最大の目的なのである。うまく書ければ書けたなりに、まったく書けなければ書けないなりに、そこに至った思考の過程を重視する。つまり、学生は作業をとおして、生々しく自分自身と向き合うことになる。

その後、ワークシートの内容と設問の意図を説明し、予測される回答や、書き換えの箇所では「正解」を提示する。資料を用いた講義を行い、終了後、ワークシート下部の「授業で学んだこと、思ったこと」（以下、「学んだこと」）を記入してもらう。授業の初めに書いた自分の主張が、授業をとおしてどのように変化したのかを振り返り、学生が自己分析をすることによって気づきを経験してもらうのがワークシートの役割である。

さらに、「ことばとジェンダー」の全講義終了後、レポートを作成させる。表題は特定しないが、授業で学んだことを踏まえて、言語改革に関してどのような問題点があり、それをどのように解決すべきなのか、自分が当事者としてできることを必ず含めることを条件としている。

資料：ワークシート（書式等は改変し、一部のみ記載。余白は削除してある）

1 回目の授業（ワークシート 1）

1. 次のいいまわしは国語辞典にある例です。

*（ ）の中には「娘」と「息子」のどちらが入ると思いますか。入れてみよう。

あととり（ ）／むことり（ ）／放蕩（ ）／極道（ ）／愛（ ）
どら（ ）／（ ）を手放す／うちの（ ）は奥手だ／（ ）がかたづく

*（ ）の中には「娘」と「青年」のどちらが入ると思いますか。入れてみよう。

あの（ ）はいかすね／年頃の（ ）／（ ）にありがちな失敗
気立てのやさしい（ ）／色の浅黒い（ ）／大胆な（ ）／縁遠い（ ）

2. 次のことばを自分なりに定義（説明）し、異なる性別をあらわす対語があれば書いてみよう。

OL： 若奥様： 看板娘： 帰国子女： 主婦：
女優： 青少年： 人妻： 老婦人： 男まさり：

2 回目の授業（ワークシート 2）

1. 次の各文は新聞の見出しまたは記事です。下線を引いたことばはジェンダーの視点から不適切です。できるだけ意味を変えないで、下線のことばを別のことばで言い換えてみよう。情報として不必要なものには□に×を、文章全体の構成に問題がある場合は□にチェックを入れてみよう。

☐カンボジア支援 女医が半年視察：

☐女流陶芸家が上越市で個展：

☐PKO で少女売春…12～14 歳の少女を売春婦に利用：

☐レア夫人は「主人はあなたを和平のパートナーとみなしていた」と答え…：

3 回目の授業（ワークシート 3）

1. 次の各文の下線部のことばが表わす性別に丸をつけ、そう思った理由を書いてみよう。（出典：インターネット）

* ビジネスマンも取引、利益、販売促進、キャンペーン、企業買収など長期目標を立てる。女・男：

* 雑誌や広告業界などで活躍しているプロカメラマン撮影の無料写真素材。女・男：

* 島根県益田警察署は、遊びの要素も取り入れた『ポリスマン川柳』を署員から募集した。女・男：

* ハウスワイフ英会話は一週一回、1 時間のレッスンです。女・男：

2. 次のカタカナ英語は英語の性差別語からきています。性中立語に言い換えてみよう。

サラリーマン： カメラマン： スチュワーデス：

レディース： フレッシュマン： スポーツマン：

4 回目の授業（ワークシート 4）

1. 次のことがらについてそう思う場合は□に○をつけてみよう。

☐日本語には「女ことば」と「男ことば」がある

☐女は男よりていねいなことばを使う

☐私はことば使いが悪いとまわりの人に注意されたことがある

2. 次のことば・表現には女・男のどちらのイメージがあるか、直感的に○をつけてみよう。またなぜそう思ったのか理由を書いてみよう。自分が使う場合は□にチェックを入れてみよう。

☐女・男 きれいな花だね：

☐女・男 パンダ、見に行こうぜ：

☐女・男 おビール、お飲みになる？：

☐女・男 スマホ、欲しくね？：

*「3. 自称詞について」と「4. 自然会話の性別について」は省略する

3.3 単位認定の評価と客観性

この授業では、ワークシートの「記述の仕方（授業にまじめに取り組んでいるか）」、「授業の理解（授業の主旨を捉えているか）」、「自己表現力（思考の過程や気づき・発見が自分のことばで述べられているか）」も評価の対象となる。特に差別や人権の問題を扱う（筆者の）「ジェンダー論」では、「学んだこと」に綴られる、性差別や固定的ジェンダー意識を無条件に肯定する意見や、感情的で主観的な主張をどう評価するのか、また評価してよいのかという非常に繊細な問題を含んでいる。反対に、学生によっては高い評価を得ようとして、美辞麗句で授業内容を絶賛したり、「多くのことを学んだ」という平面的で悪意のない嘘としてふまじめな授業態度が表面化したりすることもある。これはレポートについても同様である。

できるだけ客観的視点から学生の「学んだこと」を分析するために、学生の差別的な発言はその率直な主張として採用し、「虚偽の気づき」については、文脈から判断して分析対象からはずすこととお断りしておく。

4. 授業の展開

授業では、性差別意識の暴露を糾弾するのではなく、ジェンダーへの固定的な意識やその表現が知らないうちに植えつけられた原因と過程を説明する。重要なのは、その暴露された性差別意識を学生自身がどのように捉えて、自分の気づきや内省として昇華させることができるかという点である。特に、若いとはいえ、学生は20年前後の実績を持つ言語運用者であり、自分のことばを否定されることは人格やアイデンティティを否定されるに等しい感覚を持つことを知っておく必要がある。

「ことばとジェンダー」の講義を円滑に行うためにも、その前の講義「ジェンダーとはなにか」で「3つの性」について説明しながら、社会の構造的差別に触れることにしている。学生は「ジェンダー」の正しい理解（定義）ができていない⁽¹⁾と推察されるため、身近で多様な例をあげて多角的に説明する必要がある。授業内容の要旨は次のようにまとめられる。

1. 性の二元論は間違いである。インターセックス（間性、半陰陽、医学

用語では「性分化疾患」)の存在、トランスジェンダーやトランスセクシュアル(性別越境者、医学用語では「性同一性障害」)の存在、同性愛、両性愛などの多様なセクシュアリティの存在。

2. 「ジェンダー」を善悪の価値基準でとらえない。また、「ジェンダー＝女性差別」ではない。女ジェンダーの裏側には男ジェンダーの問題がある。
3. 構造的差別を社会の問題としてとらえる。「男であるあなた」に問題があるというよりも、「社会的」女や男という視点を持つ。また、女が必ず被差別者であるとは限らない。
4. 必ず性差別の問題と他の差別問題との交差の視点を持つ。
5. 社会秩序・規範を疑い、「普通」や「正しい」、「気づかないうちに」や「なにげなく」という意味を考えてみる。
6. 時代の限界、世代の限界を理解する。過去から現在、現在から未来への時間の流れを俯瞰的に眺める。
7. 「人ごと」と思うってしまうことの危険性を知る。当事者性意識の喚起。
8. ことばや表現は時代とともに変化しうるし、その変化を起こせるのは個人でもある。
9. 社会の事象とことばの連続性。「社会が変わらなければことばが変わらない」のも正しいが、「ことばが変われば社会が変わる」⁽²⁾。
10. 教員自身の差別への気づきと被差別の経験を語る。学生との体験の共有。

5. 学生の自己分析に見る気づき

ワークシートの回答には、学生自身がジェンダーに対してどのような意識を持っているか、またジェンダーにかかわることばや表現、その使用法(広義のジェンダー表現)に対してどのような意識を持っているかが表れている。学生によっては、最初の授業のワークシートで深い自己分析にいたるものもいれば、レポート提出の段階においても気づきがないものもいる。また、言語習得過程における刷り込みによる過度のジェンダー意識から、学生の性差

別意識がワークシートに暴露されることが多い。

学生の性差別意識の表現は、全体として冷静で内省的である。しかしあえて性別二元論的にその特徴を記せば、男子学生は自分の差別性（社会的加害者性）を受け入れず、冷笑的態度や、ややもするとそれを怒りとして表現する傾向にある。男である自分が責められているような居心地の悪さを感じるようだ。また女子学生は自分の被差別性（社会的被害者性）に疑問を抱かず、「差別など感じたことがない」と断言する場合もある。差別を感じない環境の中で生まれ育った学生がいることは否定できないが⁽³⁾、社会構造の差別がある中でこうした意見を見ると、女子学生が女性差別意識を肯定し、それを内面化していることが分かる。男子学生が、「自分は（女性を）差別をしたこともないし、（男性として）差別をされたこともない」と言うこともある。

こうした中、学生のことばの差別意識の気づきの過程から言語改革への意識の変化は次のような変遷をたどるのが一般的である。

I. 気づき

①事実を知る、②記憶をたどり過去を再体験する、③性差別表現の受容

II. 怒りや困惑・戸惑いと罪悪感

①性差別表現の存在に対する怒り、②自分の性差別性に対する困惑や戸惑い（ときに、他者への怒りに転嫁）、③他者を傷つけたかもしれないという罪悪感と反省、④性差別表現やジェンダー表現の捉えにくさ

III. 性差別表現への対処の模索

①無力感やあきらめ、②「言い換え」をしてさらに無力を感じる、③言い換え語の効果を感じる

IV. 言語改革に参加したいという意欲

①気づきの重要性を知る、②人にも気づいてほしいと思う、③実際に個人的な言語改革をしていきたいという意思表示

必ずしもどの学生もすべての段階を通過するとは限らず、ずっと初めの段階に留まっている学生もいれば、行きつ戻りつする学生もいる。また、その

気づきの質もさまざまであり、浅い気づきだけを繰り返す学生もいれば、深い気づきに到達し、それを自分のことばで語り始める学生もいる。

次の節から学生の気づきを見てみよう。学生の書いた「学んだこと」の分量は1行程度から何十行にもおよぶことがある。主張に矛盾があったり、主張の強さにも濃淡があったりするので、その一部だけを切り取って上記の気づきの過程に機械的に当てはめること（量的分析）は不可能である。

以下に回答の特徴をいくつかに分類して、代表的な学生の回答の全文、または一部を紹介するが、内容はかなり横断的である。なお、学生の文章は基本的に原文のまま記載するが、文意を損なわない程度に修正し、誤字脱字は訂正していることをお断りする。また、回答の後ろには、偏った学生の回答を載せない公平性⁽⁴⁾を明示するための「学生の固有番号」、差別と被差別の当事者性を見るための「性別」、3.1の「授業計画と内容」との照合のための「ワークシートの通し番号」をつけた。[]内は筆者の注記である。

6. 学生の自己分析

6.1 自らの性差別意識を受容できる学生の態度

多くの学生は最初の授業で「日本語には性差別語や固定的なジェンダー表現がある」事実を理解し、自らの性差別意識を受容している。知らなかったとはいえ、そうしたことばや表現を使ってきたことへの内省があふれている。ほとんどの女子学生と多くの男子学生である。

(1) さまざまな気づき

* 辞書では私たちはその内容は全て正しい知識だと考えがちだが、その辞書の筆者の性別にもよるので、すべて正しいわけではなく偏っている点もあると思った。(062、女、1)

* 国語辞典に載っているいいまわしに、女性か男性を表わすことばを当てはめてみて、私の考えと違っているものが多かったため、時代の変化に伴う、ジェンダーに関する人々の考えの変化を感じた。(113、女、1)

* 「女」という文字が目立って見えるのは、性が明示されていないことば

は基本的に男性を表わしているということに今まで気づかなかった。知らず知らずのうちにそういったことが染みついていくのは本当に怖いと思った。思想的なものなども、ある種洗脳的に、メディアは私たちに無数の情報を一方的にあげせてくることは、インターネットが普及した今、更に問題になってくると思う。(052、女、2)

*生活に浸透しつつある英語で、知らないうちに差別をしているのが怖いと思った。(略) 英語(カタカナ)に流されて「man=人間」という男性の優性をどこか認める自分もいて、無条件に受け入れているのかもしれないと思った。(149、女、3)

*男性にはことばの使い方を強制しないのに、女性には強制するのはどう考えても不公平だと思います。ことばを強制したり否定することは大げさに言えば、その人の人格を強制・否定することだと言うこともできます。(008、女、4)

*プリントで「現代の若い女性は『基本の日本語』を取り戻しつつある」というのがあったが、その内容にとっても感心した。男女が同様に「場面に応じた使い分け」の教育が必要だと思うし、現代の女性の力強い生き方とことばで、旧来的な社会の価値観を変えるというのは喜ばしいと思う。本当に問題なのは古い考え方に固執している人々だと思う。(014、男、4)

*私は最近、男より女のほうがことば使いがひどいと思っていたけど、今までがていねいすぎただけで、考えてみれば、男と一緒にことばを使っているだけだということを学びました。(146、男、4)

(2) 他人からジェンダー表現を使われたことへの不快感(記憶)

*自分は幼いころよく「女の子みたい」などと言われていて、その度に普段よりキツイことばを使ってみたり、「俺」を強調したりしていたのを思い出しました。(015、男、4)

*「女の子なんだから、そういう言い方しないの」と今まで何回言われてきたかわからないくらい言われてきた。男ならことば使いが雑でもよく

て、女はダメ。そんな決まりはないのに、それが一般的な常識である以上、ダメなものはダメなんだと思うしかなかった。(091、女、4)

*中学生の時に授業で教員から指され、発言する際に「もっと男らしく元気に答えなさい(しゃべりなさい)」と言われたことがあるのを今でも覚えている。今考えると、「らしさ」を押しつけるということが普通に行われている日常がジェンダー規範を確立し、今の世の中になっていると私は思う。(110、男、4)

(3) 知らないうちに、ジェンダー表現を使っていたことへの気づき

*男っばい私は、「男の子ならもっとしっかりして!!強くいて!!」と思ってしまう。これも大きな差別だと分かっているけれど、この考えはすぐには変えられない。私も差別的に考えていて、ことば使いをしていたと分かった。(114、女、1)

*「女らしい」と言って、「めめしい」、「なよなよしている」というイメージが私の頭の中にはありましたが、今考えてみると「女らしい」ということばは、女をさげすんでいると思いました。私は女です。(略)いつもこのようなことばを何も考えずに平気で自分は使ってしまったということにがっかりしました。(123、女、1)

(4) 他人からは言われたくない、他人には使ってしまう、その矛盾

*[国語辞典に]「女=声が高い、気が弱い、決断力にかけている」など、別に当てはまらないのに定義されていて違和感を覚えた。しかし私も、「この人女々しいな」など、男の人に対して思ったことがあるので、それは差別だったのかもしれない、と思った。意識はしてないけれど、自分の中にも偏見が根づいてしまっているということに気づき少し悲しくなった。(056、女、1)

*[これまでは]そういう区別[男が基で、女が後づけ]に対して(略)イヤな気分にはならなかったのですが、女性が結婚してるかしてないかでつけることば[敬称]が変わるなら、「男は[一生]Mrじゃなく、結婚してな

い人はJrでもよい」と言われたとき、それはイヤだなと思いました。(160、男、3)

- * 友だち(女)が「ふざけんなよ」とか言ったら、僕は「もっと女らしく話しなよ」とよく言ってしまうていた。それぞれらしさというものがあるから、規範し合って[規範を押しつけ合って?]はいけないと思った。(059、男、4)

(5) 言い換え語や性中立語を知らないことへの気づき

- * 性を使わないでことばを表わすのは難しく、ことばがなかなか出てこなかった。少しできたところもあるけれど、日本語をよく知らないんだなと痛感させられた。なんとなく性を使ったことばのほうが使いやすく感じてしまった。(092、女、2)
- * 報道などで普段よく聞くことを言い換えるだけなはずなのに、なかなかことば出てこなかった。自分の国語力の無さを実感すると共に、普段から差別的なことばが横行しているのがわかった気がした。(163、男、2)

(6) ジェンダー平等なことばや表現への転換の難しさ

- * 「男らしさ」、「女らしさ」を固定してしまうようなことばは、あまり良くないものだと思うが、そのことばや言いまわしが、社会全体に定着してしまっている為、取り除くことは難しいのではないかと思った。(略) 社会の状況の変化と共にそういった規範も変化していくだろうし、私たちも努力しなければならないと思った。(066、女、1)

(7) 辞書、教科書、メディアでこそジェンダー平等なことばを使うべきだとの要求

- * 辞書は小学校のころから慣れ親しむものなので、例文にこんなにジェンダーの要素が含まれていると、子どもたちに与える影響も強いのではないかと思いました。(080、女、1)
- * 何気なく読んでいる新聞の見出しにもジェンダー視点から見れば不適

切と思われることばが使われてきていることを知った。しかし上記の不適切なことばを見て、自分はあまり違和感、抵抗感を感じなかった。おそらく、これらのことばに対してあまり関心（疑問）を持たなかった自分の意識の低さもあるが、新聞の見出しなどでこれらのことばに見慣れてしまっていることが原因であると思った。このようなことから、新聞の書き手もジェンダーの視点を意識しながら書くことがこれから求められると思う。(078、男、2)

*記者たちは、人々に公平な立場から物を言うために、ジェンダーの考え方をしっかり身につけようとは思わないのか、それとも知った上で書いているのか気になった。(122、男、2)

*英語の教科書にmanを「人間」と訳すように書かれているとは、驚きです。教科書は文科省が許可をしたものしか使わないはずですが、文科省の人は、どういう考えを持っているのでしょうか。(022、男、3)

6.2 自らの性差別意識を受容できない、またはしない学生の態度

性差別語やジェンダー表現について例を挙げて説明しても、事実を受け入れられない学生も少数ながら存在する。その戸惑いをそのまま表現することもあるが、あからさまな敵対意識をむき出しにする学生もいる。多くの場合は、加害者にさせられたと感じた男子学生や、ことばや表現について全く無関心な学生によって表現される。女の人権問題に関わってきた関係者であれば、こうした学生からの反発に、一度ならず接した経験があるに違いない。

(1) 性差別語、差別的ジェンダー表現ではない。言い換えや性中立語を使うことへの消極的な態度（ことば狩り）

*ことばの差別が時代につれ問題になってきて、さまざまなことばが変更されてきたが、「看護婦」を「看護師」にしたり、「保母さん」を「保育士」にしたりと少し敏感になりすぎなのではないかと思う。しかし、差別されていると思う人はたくさんいると思うので、自分もことば使いには、これから気をつけたいと思った。(067、女、1)

- * ことばについてそこにあるジェンダー的な意味を掘り下げていくと終わりなく挙げ足を取り続けているように思えてならなかった。これはあえて掘り下げて理解を深める授業であるのだろうが、それを理解していても「何もそこまで」といった印象を受けてしまった自分がいる。(097、男、1)
- * 『国語辞典にみる女性差別』では、ただ各社から出している辞典に対していちゃもんをつけているだけと感じた。著者ならどう定義するのか知りたかったし、辞典でも、ことばの制約はあると思うから、正確に(差別なしに)意味を伝えるのは難しいと思いました。(153、男、1)
- * 「ジェンダー視点」は、少し性について敏感になりすぎな気がします。確かに差別を感じる語もありますが、「主婦」や「看板娘」に私は差別を感じません。今までの歴史で、女性がしいたげられたことがあっても、今現在、差別意識を持たずに使うことに問題はないと思います。(002、女、2)
- * 「女流○○」や「女医」などといった、いちいち書かなくてもいいやつは必要はないと思うが、「OL」や「帰国子女」、「女優」、「お嫁さん」などは別に男女差別とは思わないと思う。「OL」や「老婦人」などは「ああ、女性なんだな」くらいの感想しかない。そこに差別は発生しないと思う。世間が過剰反応というか、悲観的過ぎると思う。(014、男、2)
- * 日本語って難しいと思いました。けれど正直、屁理屈にしか聞こえませんでした。もちろん自分の知識が乏しく、意識が低いだけだと思いますが。(079、女、2)
- * 「女」がつくことばをすべてなくすわけではないということですが、やるなら全部なくすほうがいいんじゃないですか？(略) 中途半端になるくらいならやらなくていいのではとも思う。(略) 作業として書き換えをしましたが、考えれば出来なくもないが、そこに必要[性]を感じないものが多いです。メディアが意図して差別語を使ったとしたらそれは犯罪だが、多くは見出しとして、キャッチーなフレーズとして使っていると思う。それを全て直していく必要はあるのでしょうか。(100、男、2)

* 先生は-manについて言及していましたが、(略) 英語ではmanは男女とも指す語でもあるのだから、別に私はwomanでもかまわないが、そこまで反骨精神をださなくても。(045、男、3)

* 多くの職業名に「~マン」とついているが、それはあくまで職業名なのだから、ジェンダー的に問題があることなのだろうかとの疑問に思った。(071、男、3)

* 段々と性差別語が性中立語へと変わっているが、自分は特に性差別語を見ても、性差別されているとは思わないです。(095、女、3)

* 自分としては、何でもかんでも性差別語だというのは、よくないと思う。悪意のある差別語は変えたほうがよいと思うが、男女それぞれ、得意、不得意のある職業はあると思う。そこは多少なり融通をきかせてほしい。(132、男、3)

(2) ジェンダー表現を不快に思う人がいることを知ったという意思表示

* 自分がよく使うことばの中にも、相手にしてみると不快に思われることがあるということを認識して、これらのことばの使い方には気をつけなければならないと思ったが、同時にこれでは日常会話がスムーズに進まなくなるのでは、とも思った。(116、男、2)

* 「マン」がつくことばを中立語にするのも難しく、普段気にしないで使っていることばが、他人には気になることだと思うと、今後気をつけなくてはいけないのかな。(098、男、3)

* 女ことばと男ことばは対語としてありますが、どちらもそのことば自体がジェンダーですね。正直、まあそんな細かいことどうでもいいじゃないと思うこともあります。ただ、それを不快に思う人がいるならやはりそれは変えていかなければならないことなんだと思います。(130、男、4)

(3) 性差別語は、差別ではなく区別であるという単純化

* 障害者や識者は「区別」と「差別」の違いを知るべきだと思った。長い歴史の中で生まれ、使われてきた日本語で、今残っているということは区

別語は必要であるということだ。事実、文豪と称される人々による著名な文学作品では[差別語？区別語？が]よく使われている。(019、男、1)

(4) ジェンダー表現の利点の主張

*このことばに関して男女差別を感じる人もいるかもしれないが、自分はそのことばを使うことで分かりやすくなるのであれば、ぜんぜんかまわないと思う。(096、男、1)

*色々と、性別を表わさない表現の方法って、意外と難しいんだなと思いました。でも、性別を表わす表現の方が伝わりやすいと思います。(132、男、2)

*差別になるような表現はするべきではないのは当然だと思うが、それによって表現の幅が狭まってしまっははおもしろくない。(164、男、2)

(5) 「男は男らしく、女は女らしく」という性別役割意識の肯定

*改めて最近の女性なことば使いが悪いと思った。確かに、女性だから女ことばを使うべきと考えるのはジェンダーとしては不適切なのかもしれないが、女性はことば使いがきれいであるべきと思う。(071、男、4)

6.3 戸惑い

初めて性差別語やジェンダー表現を知って、それをどのように捉えたらよいのかと戸惑う学生は多い。語そのものを取り上げて考えたり、その表現方法について述べたりしているが、主張に揺れが感じられるのが特徴である。

*どのことばが差別的ニュアンスがあるとか[言ったところで]、ことばとして一般的に根づいているからしかたないと思う。差別って何なのか、差別されたという人がいたら差別なのか、差別意識を持った人がいたら差別なのか。(139、男、1)

*情報を伝えるときに、一番伝えたがるのはその人の性格とその人がどのような人であるかということだと思う。その時、いかに読み手に興味を

持たせるか、ということを考えると、(略)「美女」をつけることで「どのくらい美しい人なんだろう」と読み手に興味を持たせることができる。ことばの差別と読み手へのアピールを考えると、どちらをとるかは難しい問題と思う。(012、女、2)

* 普段使っていることばの中には沢山のジェンダー視点からの不適切なことばが多いということに初めて気づいた。私個人の考えでは、少し考えすぎだと思う。「男まさり」とかは確かに不適切だと思うが、「女優」などは別に言い換える必要はないと思う。(046、女、2)

* 普段から全く気にしないで使っていることばばかりだった。気にする人がいる場合は、ことばを変えなくてはいけないと思うが、気にしないのであれば、短く、簡単に情報が伝わるので便利だと思う。しかし、男性を表わす場合は男性を表わす語をつけるべきだ。(098、男、2)

* この授業を受けて、考えて、差別とかしたくはないと思うけど、無意識で使っているし、みんなそんなに気にしていないのではないかと考えたたりすると、結局何が自分にとって、人にとって、一番良いのかというのが分からなくてモヤモヤします。(161、男、2)

* 日常生活で対象を男性に限定してしまうことば、女性に限定してしまうことば、所謂、差別用語に対して意識することはあまりなかった。小さなころはそういう差別が嫌いでも女のこらしい格好をしたり、女の子らしいと言われることに嫌悪を感じていた。今はまったくそんなことがないのは、そういう社会に慣れてしまったからなのかなと思いました。あまり神経質になりすぎるのもどうかと思うけど、知らず知らずの内におかしいと感じるべきはずの差別用語を見逃してしまっているのかなと思いました。(117、女、3)

6.4 「女性」への問いかけ

「性差別語があるらしいことは分かったが、果たしてそれを女性たちはどう感じているのだろうか」と男子学生は率直に問うている。その語を使っているのか悪いのか、当事者が不快に思うか思わないかが性差別語やジェンダ

一表現の使用の基準の拠り所にしたいという気持ちの表れなのであろう。この場合、その語が表わす当事者ではない女子学生の意見もある。

*自分がそういったことば[差別を生む用語]を女性に向けて発した場合、その女性は傷ついているのかというか、気になる。例えば、中には、「若奥様」や「女医」、「人妻」などと呼ばれることを好む人もいないかと思うことがある。(076、男、2)

*性別を表わすことばを勉強して、実際に女性を示すことば(例えば「女医」や「女優」など)で呼ばれる本人は、自分は差別されているという実感を持っているのだろうか?私は、テレビを見ていても、「女性の俳優」が「女優」と呼ばれて不快に思っているようには見えない。(119、女、2)

*女性は「女医」や「OL」など、女性を強調されることで、なぜか劣等感のようなものを感じているようですが、なぜ?(略)むしろ女性を持ち上げて「OL」など特別な呼び方をしたのだと自分は思いました。(162、男、2)

*ワークシートを毎週するにしたがって、男らしいとか女らしいとかが少し分からなくなってきたというか、もうどっちでもよくなりました。これは自分が男だから言えることで、やっぱり女性は差別語が嫌なんだろうかね。(112、男、4)

6.5 男ジェンダーの差別への気づき

「ジェンダー論」の授業では、どうしても女ジェンダーの視点が中心となる。しかしながら、ジェンダーは女のみを指し示す概念ではなく、本来男ジェンダーの視点も内包している。次のような回答が以前よりも多く見られるようになったのは時代の変化である。

*全体的に「息子」＝男は悪いイメージで使われ、「娘」＝女は良い意味で使われることが多かったので驚いた。今までの男尊女卑の社会でなぜ

そのようになったのか不思議に思いました。(034、男、1)

- * 「不良〇〇」などは、[例として]「息子」が辞書に載っているようですが、女でも、いわゆる不良がいます。(略)「女だから不良であってはならない、または男だから不良になるのは仕方ない(困ったものだ)」と、認められていることがことばの表現に表れていると思いました。(094、女、1)

6.6 過去へのまなざし、未来への展望

「ことばとジェンダー」の授業全体を通して、学生は「時代とともに変化してきたことばがあり、これからも変化し続けるであろう」というような、ことばの過去と未来に思いを馳せることができるようになる。学生の年齢を考えると、過去のことばとして遡ることができるのはせいぜい15年くらいである。授業ではその限界を伝えるとともに、今のことばが「正しい」わけでもないことを説明している。学生は次のような感想を綴っている。

- * 差別用語はその語源が悪意に満ちたものとしても、その定義自体が大多数の人々に忘れられてしまった時に、差別用語である意味を失うと思う。いずれ、現在差別用語として使われていることばが、そうした意味を失い、ただ単に性別の区別などを定義することばに変わる日がくるかもしれないと思った。(001、男、1)
- * 今は差別語と言われていることばが、時代が変われば差別語じゃなくなるかもしれないし、その逆も充分考えられるなど思いました。(008、女、1)
- * 「最近では差別用語に厳しいなあ」と思っていました、たぶん昔は昔で「びっこ」、「かたわ」、「つんぼ」あたりを禁止する風潮になった時は、同じく「厳しいなあ」と思われたのかもしれないと感じました。(024、女、1)
- * 英語の[日本語への]流入は国際化の観点から言えば良かったのかもしれませんが、同時にカタカナ語も増え、それは女と男を分けて表わす語

が増えたことは、差別を助長させてしまい、ジェンダーの観点で言えば良くなかったのかと考えることができ、新たな視点を持てた。(075、男、3)

*[授業を行った筆者の発言]「問題意識を持たねば、理解は出来ても変わらない」[という]のは確かに、と思った。歴史、権力など、簡単には変えられないものに縛られているのを再認識した。アメリカが経済的に世界で成功したから、今、権力を持っている。その言語に知らないうちに内包された思想にも、知らないうちに権力が生まれてしまっていると思う。でもそれをくつがえすにはどうすればいいのかは全く浮かばない。ただ、少しでも言い直し、書き直しを地味にしていくことを日本から発信していけばいいと思う。(100、男、3)

*英語によって意味の正確な内容をごまかされる、あるいはごまかすというのを普通にやってきた日本人。私は気づかなかった、気づけなかった、それは許されるのだろうか。そう考えると年齢層によっても知識の蓄積が変わってくるので、その責任が発生するのはどの年齢以降なのかが疑問になる。(130、男、3)

6.7 言語改革意識の発露

授業を受けた後、多くの学生は積極的に言語改革をしてゆこうという姿勢を見せる。以下のような気づきや態度も直接言語改革への期待につながってゆくとされる。

*小学生のころ、学校の連絡のプリントに「父兄」、「保護者」が入り混じって使われていたのを思い出した。(085、男、1)

*確かに[「男まさり」や「女々しい」は]男のほうが上で女のほうが下に見ているようなことばなので、もう使いたくないと思う。(090、男、1)

*男性性を限定することばを、女性性を限定することばと同じ程度使用するようにしたり、そういったことばを作ったりする。また、性別を明記したくない場合は性別を限定することばを使用しない、作るなどを社会

全体がやっていけばいいと思った。(003、男、2)

*最近、世界の「悪女」を紹介する番組が始まりましたが、先生的にはアレはどうなのでしょう？男女問わず、悪いやつは「悪人」かと…。(007、男、2)

*今、男女差別をなくそうとしている運動が盛んなのに、身近なメディアの中にこれほど多くの性を表わす表現が存在していることに驚き、これから新聞を見るときに気をつけて見てみようと思った。(032、女、2)

*「あ、そういえばそうだ」と気づくのではなく、普段目にするメディアを注意して読み取り、目標としては注意をせずとも気づく状態になれば、自分自身の考え方も幅広く、良い方向に変わるのではないかと思います。(039、男、3)

*昨日テレビでタレントが「スチュワーデス」と発言して、それをゲストの大学教授が「客室乗務員（女性）」と訂正しているのを見て、このジェンダー論を思い出しました。(140、男、3)

*manを回避するのではなく、この差別性を語るからこそ、本来の教科書の役割でなかろうか。これから「オフィスジェントルマン」と言ってみようかなとも思います。(156、男、3)

*自分も、この授業を受けなければ、きっとことばの中に潜む性差別を見落としていたに違いない。これからは、自分の中で納得するだけでなく、周りの人にもこの事実を伝えなくちゃと感じた。(109、男、4)

6.8 ジェンダーへの意識

「ことばとジェンダー」という問題から敷衍して、ジェンダーそのものの深い気づきへつながることは、授業の重要な目的でもある。学生は、社会規範、ジェンダー規範、言語規範といった問題が相互補完的な関係にあることを理解し、それを疑っている。

*性差別的表現は、私たちの周りにはあふれるほどあるということがよく分かった。私は、このような表現に慣れすぎていて、「差別だ」という

ことにも気づけなかった。女だというだけで、丁寧なことば使いを強制される。あぐらをかくなとか、足を閉じろとか、ことばだけでなく、行動もまた、「社会規範」によって、しばられている。そのことがすごく恐ろしいと思った。このことにまず気づくためにも、もっと周りにあることばによく耳を傾けてみたいと思った。(011、女、4)

*自分自身も、幼い時分には男性らしいことば使いや女性らしいことば使いに疑問を持ち、両親に何故男性と女性で用いることばが違うのか尋ねてみたことがありますが、やはり釈然としない答えしか得られなかった記憶があります。そしていつしかそのような疑問を持つことも少なくなりました。そのようなことから、社会的な性差に対する刷り込みが如何に強力な物であるかを実感しました。(021、男、4)

*この授業を聞いていると、男や女などがわからなくなってくる。女っぽいとか男っぽいとかって何だろう？考えれば考えるほど分からなくなかった。(040、女、4)

*私は小さいころからことば使いが女らしくないなどと親に注意されてきましたが、「なぜ女だからことばを変えなきゃならないのか」と疑問に思っていました。しかし、今回の講義で、もちろん「ポライトネス」としてのことば使いは場に応じて変えていくべきだけれど、それを男女のジェンダーと結びつけた二元論のことば使いにはする必要はないし、むしろするべきではないのだと思いました。また「こういったことばは女性的である、男性的である」といった概念から変えていかねばならないし、自分もそういった規範にとらわれているところがあるので、日常の身近なことばから考え直して使っていこうと思いました。(066、女、4)

7. 今後の課題

7.1 当事者性の喚起

マスメディアの用語の自主規制や労働の場での職業名称の変更、公的場で使用する用語の見直しや専門用語の変更も重要である。ただし、それが社会的合意を伴って定着するまでには年単位の、すなわちその用語の使用者の世

代が変わるほどの時間が必要だ。そして、「誰かがやってくれる」のを待っているだけでは言語改革は進まない。そのためにも個人の気づきが行動になり、個別に言語改革が実践されることが望まれる。個人が行う言語改革は、決して機械的な修正・変更、言い換えなどで達成されるものではないし、ことばの使用・不使用を他者から強制されることでもない。自ら事実を知り、その深い気づきから自発的に実行されるべきものである。

毎年、「ジェンダー（とことば）について学ぶ機会があってよかった」という学生の授業の感想をもらう。多くの学生は、今後なんらかの言語改革に参加してくれると思うし、少なくとも既存の性差別語やジェンダー表現に疑問を持つだけでも、ことばを変えてゆく原動力になりうると考えている。

しかしながら、5.2に見られるような、自らに潜む性差別意識を受容しない学生に、どのような形でことばとジェンダーの問題に気づき理解してもらうのかという課題は残る。そのためには、今後もことばだけに焦点を当てるのではなく、「3つの性」の理解が深まるような授業を展開してゆくことだと思う。性を二元論的にとらえることがなくなれば、性差別語はもちろんのこと、性差を際立たせて表現するジェンダー表現の不自由さや居心地の悪さ、不確かさ、そして固定的なジェンダーの決めつけにはあまり意味がないことに気づくはずである。

また、ことばと「当事者性」という視座にも着目したい。女子学生が男子学生よりも「ことばとジェンダー」の問題に共鳴するのは、性差別語は圧倒的に女の被差別性を映し出しているし、それは「ことばと女ジェンダー」の問題へと直結しているからである。言わば、ほとんどの女子学生は被差別者としての当事者性から逃れることができない。

一方、男子学生の場合は、性差別語が女性差別語である限り、また「ことばとジェンダー」の問題が女ジェンダーに限定されている限り、そこに自分の当事者性を見出すことは難しい。男子学生は「ことばと女ジェンダー」の問題は、実は「ことばと男ジェンダー」の問題であり、まだ女ジェンダーのように体系的に語られてはいないけれど⁽⁶⁾、男もジェンダー規範に縛られ、そのように固定的に表現され、ときに自由を奪われ、差別されていたのだと

気づいたときに初めて被差別の当事者性が明確な形を伴って浮かび上がってくるはずだ。

普通、差別問題とその当事者性を考えるとき、差別者は実際の当事者にはなれないとして、「相手の立場になって考える」という他者との関係性が持ち出される。この「他者への思いやり」という人間的な働きかけは、ことばの差別の問題でも多くの場合有効だ。だが、「ことばとジェンダー」の問題は、相手の立場になったり特別な思いやりを持ったりしなくとも、本質的にすべての人に潜在的な当事者性がある。この点、視力を失えば盲人になるといった当事者性とも、犯罪被害者の遺族としての当事者性とも異なる。

女に対するものは当然だが、男に対して「男のくせに決断力がない／なよなよしている」とか「男だったら重いものを持て／家業を継げ／働いて家族を養え」とか「髪を伸ばしたり、眉を整えたり、ピアスをしたりするのは男らしくない」といった差別的表現は、そうではない、またそうしたくない男にとって、その価値観を持たない男にとっては不快極まりなく響いている。こうした男の不自由はこの7年間の男子学生のワークシートの記述に繰り返し見られる。

このような学生の声を共有するために、できるだけ前回のワークシートの「学んだこと」を次の授業で紹介することになっている。そうすることで、女子学生から女子学生への、男子学生から男子学生への、また女子学生から男子学生への、男子学生から女子学生への意見交換ができることになる。さらに、教員が自らの経験を語るにより、教員自身にも差別と被差別の当事者性があることを伝えている。こうした間接的対話をとおして、共感をしたり疑問を抱いたりすることで、学生の当事者性の喚起が期待できる。

7.2 大学の講義への提言

大学の「ことばとジェンダー」の講義から見えてくる、その教育としての課題はおよそ次のようなものである。

まずは、学校教育、それも小学校のころからこうした「ことばとジェンダー」教育を制度として取り入れるということである。学生からも、ことばと

ジェンダーにかかわる全体を系統立てて教育の場で学びたかったという気持ちが強うかがえる。これまで多くの学生が「もっと早く、自分に偏見が生まれる前に適切なことばや表現を知っていれば、差別的な発言をしないですんだのに」という率直な気持ちを表現している。断片ではあっても、予備知識があればあるほど、大学でのジェンダー論の内容を理解するのが早いし、なによりジェンダーに関する偏見を持っていない。ジェンダー表現についての個人の気づきを醸成できるような教育制度を整え、授業は、「性差別語論」ではなく「ジェンダー表現論」といったものへと集約されるべきである。

次に、大学で行われている「ジェンダー論」の授業内容を再考することである。今後、全国の大学での「ジェンダー論」講義の調査を行い、その中の言語学の取り扱いを検討する必要性を感じている。

最後に、授業で用いられている研究書（テキスト）の問題である。多くの「ジェンダー論」や「女性学」で使うことを目的とした研究書には、「ことばとジェンダー」の項目がない。ジェンダー論が社会学の中に位置づけられていることもあり、ことばの問題は「言語論」として取り扱われることがないのである。つまり、ジェンダーにかかわることばや表現の問題は大学という高等教育の場で素通りされてしまっているのだ。これは性的少数者の問題が「女性学」では長い間とりこぼされてきた状況に似ている。

テキストとして用いる研究書の編さんに言語学の研究者が参加することで、「ジェンダー論」の中での言語学の位置づけをテキストでも明確に打ち出す必要があるであろう。または、「ジェンダー論」という講義の中で、言語学の研究者がことばや表現にかかわる問題を集中的に取り扱うということをもっと戦略的に行うべきだ。

7.3 まとめ

「ことばとジェンダー」の講義をとおして、大学生は潜在的な性差別語やジェンダー表現への気づきを持っていると感じている。ただ、気づきの装置、すなわち体系立てた学習の機会としての教育環境が未整備で、学生の日々の経験を語る場も、疑問に答えてくれる場もない。そのような意味において、

ワークシートを用いた学生自身の内面の吐露と自己内省は、実践的な「ことばとジェンダー」教育のひとつの形と考えられる。教育課程において生徒や学生がことばとジェンダーの問題に触れる機会をもうけること、そのためには適切なテキストが選べること、そして授業内容が実践的なものであることが言語改革をすすめる力になってゆくと考えている。

注

- (1) 大学生にとった『ジェンダー』の定義に関するアンケートでは、「ジェンダーを理解している」学生は女子で14.7%、男子で10.9%にすぎなかった。学生の「ジェンダーの定義」とその分析は佐々木（2006）を参照のこと。
- (2) 筆者が「ことばとジェンダー」の講義の最後に伝える言語改革への提言。
- (3) よくある事例としては、「両親共働き」（教員や公務員であることが多い）、「子どものころから家族みんなで家事を分担」、「学校では混合名簿」、「女子が生徒会長」、「女子高出身」など、ジェンダー平等な環境が生活のさまざまな場で整っていると、女子学生は差別を感じにくい。もともと社会的優位な立場である男子学生であればなおさらである。
- (4) 同じ学生の回答を採用している箇所もあることをお断りしておく。また学生個人の4回分の回答を眺めると、回を追うごとに理解が深まっていく学生、納得と反発を繰り返す学生、終始一貫した態度を取る学生とさまざまであることをつけ加えておく。
- (5) 男ジェンダー問題の可視化は男性学として体系的にまとめることが可能であると考えるが、現在においても「男性学」を冠する概論的な研究書は少ないし、「ジェンダー論」と冠する研究書で扱われる問題は多くが女ジェンダー（女性学）視点である。

参考・引用文献

- 佐々木恵理（2001）「非性差別語への言語改革に今必要なこと」遠藤織枝編『女とことば—女は変わったか 日本語は変わったか』pp. 228-240 明石書店
- 佐々木恵理（2006）「日本語人は『ジェンダー・フリー』をどのように理解しているか—大学生の調査から—」『ことば』27号 pp. 68-81 現代日本語研究会
- 佐々木恵理（2007）『ジェンダー・フリー』の言語領域からの分析—“gender-free”の誤用と『ジェンダー・フリー』の混乱— 遠藤織枝編著『ことばとジェ

ンダーの未来図ージェンダー・パッシングに立ち向かうために』

pp. 228-262 明石書店

セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク編著 (2003) 『セクシュアルマイノリティ
同性愛、性同一性障害、インターセックスの当事者が語る人間の多様
な性』 明石書店

田中克彦 (2002) 『差別語からはいる言語学入門』 明石書店

中村桃子編 (2010) 『ジェンダーで学ぶ言語学』 世界思想社

沼崎一朗 (2006) 『「ジェンダー論」の教え方ガイドー女子大生のための性教育とエンパワ
ーメント』 (フェミックスブックレット1) フェミックス

日野玲子 (1994) 『実践でかたる女性学教育』 明石書店

(追記) 私の授業は厳しく、ワークシートに自分自身をさらけ出すのは辛い作業です。そ
れでも多くの学生が真摯な態度で授業に臨んでくれました。私自身も学生の回答から多く
のことを学んでいます。今回の論文作成に関して貴重な資料を快く提供してくれた日本大
学文理学部の2011年前期「ジェンダー論」の受講生に心から感謝の気持ちを伝えたいと思
います。

(ささき えり・獨協大学非常勤講師)